

ロシア帝国の貴族文化史研究をめぐって

**Recent Studies in the Cultural History of Russian Nobility
in the 18th and Early 19th Centuries**

小野寺 歌 子

ロシア帝国の貴族文化史研究をめぐって

Recent Studies in the Cultural History of Russian Nobility in the 18th and Early 19th Centuries

小野寺歌子 (Utako ONODERA)*

キーワード：ロシア、貴族、文化、教育

Keywords : Russia, nobility, culture, education

はじめに

18～19世紀初頭のロシア帝国において、貴族は支配層として帝国の政治、外交の中枢を占め、経済を主導した(注1)。そしてロシア帝国史家リーヴェンが「19世紀以前、教育と文化は一般に私的に獲得されなければならなかったため、それらはおもに貴族エリートに独占されていた」[Lieven 2006:232]と述べるように、貴族は教育の受益者、文化の担い手でもあった。それゆえ、当該時代にかんする歴史研究において、貴族は中心的な検討対象として位置づけられている。この貴族研究のうち、本稿では教育文化にかんする研究動向を分析し、今後の課題を示してみたい。

ロシア貴族の教育文化にかんする研究は、それ自体としてはけっして長い歴史を持つわけではない。ここでは、教育制度史や教育思想的な問題関心から、官立学校教育を中心に多くの研究がなされてきた。一方で、それらの研究においては家庭教育、私立学校教育、修学旅行などが過小評価されがちであった。たとえば、貴族の主要な教育形態であった家庭教育については、史料的制約が大きく、一般化が困難であるために、教育制度にかかわる範囲で言及されるか、あるいは文学作品に描かれた否定的記述が抽出されることで満足する傾向にあった。それらを考慮に入れた貴族教育文化史の全体像は、いまだに浮かび上がってきていない。貴族教育文化を理解する際に、これらの教育形態に注意を払わず、教育制度史などの研究成果にもっぱら依拠することには慎重な姿勢であるべきである。さらに、国家による教育システムの整備が進む前の18～19世紀初頭において、これらの教育は国家勤務を意識して行なわれた。国家もそれらを私的領域とみなして統制外に置いていたわけではない。その意味からすれば、これらの教育のあり方を検討し、正当に評価することは、教育文化の変容プロセスのみならず教育制度の発展プロセスを研究するうえでも意義がある。

* 東北大学東北アジア研究センター

以下、第一節では、ロシア貴族史研究をみる手がかりとしてヨーロッパ貴族史研究の動向を概観する。そのうえで、欧米およびロシアにおけるロシア貴族史研究の動向を検討する。第二節では、貴族教育文化史研究のうち(1)政治史、国制史、(2)家族史、女性史、そして(3)文化史にかかわるテーマについて、研究状況と議論を紹介する。その際、議論の出発点として、当該研究領域について最初に全体的な考察を試みたラエフの作業を確認する。最後に、ロシア貴族文化史の視点から本稿の議論を総括し、今後の課題を設定してみたい。

1. 貴族史研究の全体的動向

1995年、『17～18世紀におけるヨーロッパ貴族』を編集したイギリスの貴族史家スコットは、その序文においてヨーロッパ貴族史研究の動向を以下のように整理している。貴族史研究の伝統的方法として、まず家の歴史 *family histories* がある。それは19世紀から20世紀初頭にかけて多数刊行された、一族の末裔が家門の繁栄を称え、祖先を賛美しているような書物を利用するものである。これらの史料は、利用する際に十分な注意が必要だが、非常に貴重な情報を含み、軽視すべきではない。もうひとつの方法は、貴族の政治史および国制史である。この研究領域ではおもに、近世に出現しつつあった近代国家と伝統的なエリートの関係に焦点が当てられてきた。戦間期に、歴史研究の叙述スタイルは政治物語から構造分析へと次第に移行し、それとともに研究テーマも拡大していく [Scott 1995a:3-4]。

1970年代半ば以降の歴史研究の顕著な特徴は、ヨーロッパ貴族がふたたび関心を集めるようになったことである。歴史家たちは、エリートが人間の活動のあらゆる分野で決定的な役割を果たしたと認識するに至り、歴史的現象としての貴族を再発見した。これはとくに近世、すなわち17～18世紀にかんする研究においてははっきりと表われていた [Scott 1995a:1-2]。

近年の研究方法は、つぎの4つに大きく分類される。第一にあげられるのは社会経済史的アプローチである。ここでは、地主家族の権力基盤に注目しながら、その主要構成員について考察が行われる。このアプローチによって、近世エリートがおもに貴族家族あるいは家 *house* を単位として形成され、家族が個人の行動を方向づけ、行動の枠組みを与えていたことが確認されている。第二に、特定の傑出した貴族の伝記研究がある。そこでは、対象となる人物の貴族社会の中での役割よりも、個人の人生に大きな関心が向けられている。第三に、特定の一族というよりも、ある地域の貴族や注目すべきエリートの中の主要グループを対象を限定して、貴族の全体史をめざすアプローチがある。フランスの歴史研究者がその最先端にいるが、それはアナル学派の影響や国家博士論文制度の導入を背景としている。近年ではオランダやアメリカの研究者も、地域あるいは地方のエリートにかんする社会経済史を研究している。最後のアプローチは、エリート特有のエートスを考察し、近世における「貴族」概念の変容プロセスを解明するもので、過去20年間でとくに盛んになっている。これは同時代の文学資料 *literary*

evidence を駆使して、社会文化的視点から貴族をみる方法である。また、価値体系を確認するというよりも、特定の人類学的範疇を採用して分析する傾向がある。

このように研究史を整理したうえで、スコットは、17～18世紀の貴族が経営の悪化と中間層の台頭、中央集権国家や他の社会集団に対する伝統的な権威の失墜、アイデンティティーの危機を経験したことを強調するのではなく、むしろ経済が拡大するなかで経済的に繁栄し、政治的地位を強化、勢力を伸張させたこと、貴族の特権やそれを支えた不平等は、啓蒙思想がそれを問題視するまでは攻撃を受けなかったことを理解すべきだと主張している [Scott 1995a:3-9]。1996年に、ヨーロッパ貴族にかんする概説を著わしたデュワルドもまた、「貴族史への新しいアプローチは、『危機』や『転換』 transition という用語が近世における貴族の経験を表現するうえで、もはや不適切に感じられるという事実から出発しなくてはならない。専門家は、ヨーロッパの多くの地域で貴族がどうやら大規模な社会変動を切り抜け、財産や権力を維持し、驚異的に復活したことを発見した」と指摘している [Dewald 1996:xiv-xv]。このような支配層としての貴族の根強さを、とりわけロシア帝国の拡大がみられた18～19世紀初頭におけるロシア貴族のあり方、貴族と皇帝、官僚の関係を考えるうえでも念頭に置く必要があるだろう。

ロシアの場合、帝政末期から1920年代まで、同時代のヨーロッパと同様、家の歴史や政治史、国制史を中心とする貴族研究が主流であった[代表的な研究として Романович-Славатинский 1870]。しかし、社会主義政権の成立とスターリン体制下の抑圧により、旧支配階級としてネガティブなイメージを帯びた貴族の研究は停滞を余儀なくされた[Фаизова 1999:8-10; 土肥 2000: 87-98も参照]。記号論の大家ロートマンが、その没後に出版された『ロシア文化講話——ロシア貴族の生活様式と伝統(18世紀～19世紀初頭)——』の冒頭で書いているように、「プーシキンやデカブリストが属した階級の日常生活にかんしては、学問の世界では久しく『何者にも属していない土地』とされてきた。ここには、『貴族の』という形容がつくあらゆるものに対して形成された偏見が影を落としていた。民衆の意識のなかでは長い間、貴族というとすぐにかの『搾取者』のイメージが浮かび、例のサルトゥイチャーハの話やらなにやら、それにまつわる多くの話が連想された」[Лютман 1994:15] (注2)。たしかに、マルクス・レーニン主義にもとづいた政治史、国制史の枠内でロシア帝国の統治における貴族の役割が検討され、農民史の観点から農奴制下の領主経営が詳細に分析され、また文学史の領域で貴族出身の作家の創作生活が素描されることはあっても、ロシア貴族を直接的なテーマとする研究は、ごく限られていた。その一つが、官僚層の形成過程を考察したトロイツキーの作業である(注3)。その手になる『18世紀のロシア絶対主義と貴族——官僚制の形成——』では、アルヒーフ史料をもとに、勤務者の官等の昇進実態が解明されている。そのうえで、官等表が導入された結果、出現した官僚という新たな社会層の社会的出自や教育歴が分析されている。トロイツキーは、貴族の国家勤務義務を撤廃した1762年の貴族解放令後も多くの貴族が国家勤務を継続する一方で、勤務

義務の廃止が非貴族出身者の参入を促し、官僚の社会的構成も変化したとの結論を導いている [Троицкий 1974] (注4)。

貴族研究の拠点は明らかに欧米にあったといえる。「貴族の時代」である18～19世紀初頭にかんする政治史、国制史研究が多数発表され、専制国家における貴族の役割が詳細に検討された。代表的な研究をあげるならば、スコットが第三のアプローチに属するものとして名前をあげたミーハン・ウォーターズの研究がある。18世紀露英関係の専門家クロスが中心となって組織した18世紀ロシア史研究会の国際シンポジウムで、ミーハン・ウォーターズは、国立中央古文書館 ЦГАДА やソビエトの他のアルヒーフに保管されているピョートル一世時代の裁判記録史料をもとに、四等官以上の文・武官179名の人間関係を解析している。そして、あらゆる政治権力が専制君主に集中する状況下で、貴族エリートが派閥闘争に終始していた実態を明らかにしている [Meehan-Waters 1979:229-246; Meehan-Waters 1982も参照]。ただし、スコットが整理したようなヨーロッパにおける貴族史研究の多様化をふまえるならば、ロシアにかんしては貴族史研究としての展開がバランスを欠いたものだったと言わざるをえない。

ところで、本稿の検討対象である教育文化は、スコットの分類にあえてもとづくならば、第四の研究方法、すなわちエリートのエートスにかんする社会文化史研究にもっとも近い。これに重なるものとして、1960年代以降のラエフを中心とするインテリゲンツィア研究がある。

ロシア・インテリゲンツィア第一世代の多くが貴族出身者であったという事実は、よく知られている。ラエフは、このインテリゲンツィアの進化 *evolution* と行動を理解するためにはその制度的、知的起源を正確に理解しなくてはならないとの問題意識から、「18世紀貴族」という副題をもつ著書『ロシア・インテリゲンツィアの起源』において、貴族が就いた国家勤務の形態とこの勤務が貴族に与えた影響、貴族の教育体験、貴族へのヨーロッパ思想の影響について考察している。史料として、行政文書、同時代の文学作品、定期刊行物、伝記、モノグラフ、そして著者の主観が入っていて回顧的傾向も強いが、慎重に利用するならば大変価値の高いものとして回想録や日記、書簡が利用されている [Raeff 1961:6-7]。

ラエフによれば、貴族はその主たる活動である国家勤務以外にその才能や精力を注ぐ場がなく、活動を表現する有意義な手段も持たなかった。勤務上の官位がもたらした貴族の社会的地位を決定づけていた。このことが、貴族を国家に従属させた。貴族には、国家勤務のために必要な教育を受ける義務も課せられた。教育は国家勤務とは不可分とみなされ、社会の進歩や国力の強化にとって必須と考えられた。文化は社会や国家が発展するうえで重要なものであると考えられたが、それはあくまでも近代化という国益をもたらす手段として評価されていたにすぎない。国家勤務の重要性やそれが求める条件が18世紀ロシア貴族の思考、行動、生活様式を大きく規定した。官僚制が確立されるにしたがい、貴族の国家勤務もおのずとその性格を変えたが、国家勤務を中心に位置づけた思考様式や行動様式の多くは19世紀初頭においてもそのまま

残った。それを、インテリゲンツィアの第一世代は親の世代にあたる18世紀ロシア貴族から継承することになる[Raeff 1961:119,120,131,133-134]。

たしかにラエフの研究は、国家勤務がロシア貴族のあらゆる領域に影響を与えたことを過大評価するきらいがある。とはいえ、貴族という特定の社会集団の歴史にかんしてその全般的傾向を総括した『ロシア・インテリゲンツィアの起源』は、貴族史研究者のみならず、広くロシア史を専門とする者にとって必読書とみなされ、現在もなおその価値を失っていない。

ソ連邦が崩壊したまさしく1991年12月、パリのフランス国立社会科学高等研究院が開催した国際シンポジウム「16～19世紀初頭のロシアにおける貴族・国家・社会」は、欧米におけるロシア貴族研究の一到達点を示している。同シンポジウムの報告は、フランスのロシア史専門誌『ロシア・ソビエト世界評論』、1993年第34巻第1-2号に論文として掲載された[Cahiers 1993]。そこには、フランスを代表するロシア史家コンフィノをはじめ、ラエフやクラムメイ、ジョーンズ、デュークス、ルドンら著名な研究者が名を連ねている。その内容も対外政策や国家機構などにかんする政治史、国制史研究、ルーマニアやスコットランドの貴族、沿バルト諸県のドイツ貴族との国際比較、ロシア貴族の名誉や特権、「貴族」概念を扱った研究など多様である。本稿の課題と直接関連するものとしては、ベレロヴィチの「18世紀後半ロシア貴族の『グランド・ツアー』におけるフランス」がある。これについては後述したい。

ソ連邦の崩壊は、ロシア本国そして欧米のロシア史研究にとって大きな転機となった。まず、ロシアでは貴族史研究に対するネガティブな評価が除去された。これまで歴史的必然とみなされてきたソ連時代が「通常の発展」からの逸脱として位置づけられ始める一方、帝政ロシア史を再検討する一環で、貴族が主要な研究対象として復活した。貴族史研究が再始動する史料の基盤が強化され、さまざまな課題を設定することも可能になった。アルヒーフ史料の閲覧にともなう困難は、かなり解消された。長い間放置せざるを得なかった過去の記憶を一刻も早く取り戻したいという市民レベルでの感情の高まりもあり、貴族にかんする家系書、日記、自叙伝、回想録、書簡集、旅行記などが新刊、復刊され、それは一種のブーム的現象を引き起こした。外国のロシア史研究者との交流が活発になり、共同研究プロジェクトや国際学会が世界各地で組織されるようになった。若い世代を中心に、欧米の研究手法や成果を採用した研究が発表されるようになった。

つづいて、欧米の研究成果を総括するものとして、リーヴェンがロシアを中心とする貴族史の国際比較研究を発表している。リーヴェンは19世紀全般を対象に考察し、貴族が受けた中・高等教育の特徴として、国家主導であったこと、教育理念や教育課程が流動的で一貫性を欠いていたこと、貴族の学生にとって必ずしも好意的な教育環境ではなかったこと、ロシア貴族がヨーロッパの諸言語に通曉し、それが将来的な文化、芸術活動の基盤となったことなどを指摘している[Lieven 1992:Ch.8]。

ロシア史全般と同様、近年のロシア貴族史研究においては、学際的、文化史のアプローチへの関心が高まっている[Burbank 1998:xii-xiiiも参照]。前者の成果として、書簡史料から貴族エリートの人間関係や心理を析出しようとしたマラシーノヴァやシュミットらの心性史研究[Марасинова 1999; Шмидт 2002]、上述のロートマンの名著を代表とする日常生活史研究[Лютман 1994]、古代から19世紀初頭までの女性の私生活の変遷を描いたプシュカリョーヴァの女性史研究[Пушкарева 1997]がある。

後者としては、たとえば、旅行など人の移動や異文化交流、帝国の多民族性とかかわる研究、そして文化表象の歴史や保全をテーマとするウサージバ（屋敷、所領）研究をあげることができる。このうち旅行については次節でくわしく取り上げたい。ウサージバ研究は、アメリカのルーズヴェルトによる本格的な研究が発表され[Roosevelt 1995]、ロシアでもイヴァーノヴァ編の重厚な研究『16～20世紀のロシアにおける貴族と商人の農村ウサージバ——歴史的概観——』が刊行された[Иванова 2001]。2002年5月には、モスクワの国立歴史博物館でシンポジウム「祖国・世界の文化現象としてのロシアのウサージバ」が開催され、芸術史や文化史、歴史学、郷土史の方法や成果を統合する学問分野としてウサージバ研究の可能性が議論された。

このように、ロシアの貴族研究は、欧米を中心とする政治史、国制史、インテリゲンツィア史として展開され、ソ連邦崩壊後の近年では、長い間研究が停滞していたロシアの研究者も参加した学際的研究や文化史研究へと多様化、発展を見せている。次節では、とくに教育文化にかかわる問題をいくつか取り上げ、その研究動向を整理し、今後の課題を指摘してみたい。

2. ロシア貴族の教育文化史

(1) 1762年貴族解放令と教育文化

1762年、ピョートル三世は「ロシア貴族に対する解放と自由の下賜にかんする布告」を発した。貴族解放令として知られるこの布告は、貴族を国家勤務義務から解放し、貴族がさまざまな形態の教育を受け、その成果をもとに文化その他の領域で活動することを可能にした点で、教育文化史上、画期をなす出来事である。この貴族解放令については、これまでも政治史、国制史研究の枠内で、そこに表われている統治者と伝統的なエリートの関係をめぐって議論が重ねられてきた。そこでまず、その議論について紹介しておきたい。

まず、ラエフは解放令を、もはや貴族に依存せずとも体制維持が可能であると国家が宣言したものだとして解釈する。国家機構が整備され、官僚制が発達した結果、国家は貴族を勤務に縛りつけておく必要がなくなった。国家は今後、貴族が土地所有者あるいは民衆の社会的文化的指導者として新たな役割を担い、ロシアの西欧化・近代化に貢献することを期待した。これに対して貴族は、勤務を介して国家と密接に結びついていた従来の関係が崩壊した、と感じた。貴族は新しい社会的役割を模索し始め、彼らの中からインテリゲンツィアが生まれていく

[Raeff 1966:108-110]。

エカテリーナ期研究家デュークスは、ラエフとは逆に、専制の存続にとって貴族の支持は不可欠であり、引き続きその支持を得るためにツァーリは貴族身分の発展を促したとみている。貴族解放令および移動の自由を与えた1785年の貴族への恵与状は、貴族が苦心の末、ツァーリから獲得した譲歩であった[Dukes 1967:1,251]。『ロシア貴族の解放——1762～1785年——』を著したジョーンズも、政治的才能に恵まれなかったピョートル三世が宮中クーデターを恐れていたため、貴族解放令を与えることによって国益を犠牲にしてまで貴族の支持を獲得しようとしたのだと判断している[Jones 1973:27]。

なお、リーヴェンは貴族解放令に限定して議論をしているわけではないが、ラエフ同様、支配エリートに対するツァーリの優位を強調している。ロシアの場合、教会領を所有していたのは他にもない国家だった。[農奴解放前夜、]農民の多くは領主ではなく国家に属していた。また、君主と貴族を契約関係で結びつける封建制の伝統やそうした概念も欠けていた。それらのことが貴族の行政遂行能力の欠如や文化レベルの低さと相俟って、貴族が君主の専横を許す一因となった。19世紀に効果的な官僚制が登場すると、このツァーリと貴族の権力関係は決定的になった[Lieven 2006:239-240]。

これに対して、ルドンの理解はデュークスらのそれに近い。ルドンによれば、貴族は専制を支持し、ツァーリのたんなる協力的パートナーだったわけではなく、専制支配の拠りどころとなる支持基盤を形成していた。政策は、支配層である貴族の要望や利害にもとづいて決定された。ツァーリ自身がその立場の弱さを認識し、貴族から引き続き支持を得るべく、土地や地位を下賜した[Le Donne 1991:xiii]。ルドンは帝国支配の中枢を占めた上流貴族の血縁関係を分析し、ロマノフ家二代目のツァーリ、アレクセイ・ミハイロヴィチの最初の妻 MARIA・ミロスラフスカヤと二番目の妻ナタリア・ナルィシキナの実家に由来する二大派閥の闘争が、18世紀における専制体制の行方を左右していたことも明らかにしている[Le Donne 1987:233-322]。

ところで、エカテリーナ二世の研究で著名なデ・マダリアーガは、貴族解放令が18世紀後半以降の教育文化の起点となったことに大きな関心を寄せている。たしかに、解放令は国家勤務の廃止ではなく、勤務期間の固定化を撤廃することを意図したにすぎない。とはいえ、国家から強制されて勤務に就くのと、自らの意志にもとづいて勤務するのでは大きな相違があり、貴族解放令が貴族に与えた心理的影響は大きかった。貴族解放令によって貴族はもはや国家の「僕」ではなくなった。貴族解放令は、国家勤務者とは異質の「私人」の形成に大きく寄与した。エカテリーナの治世に、解放令の社会的な意義はとくに文化的領域で認知されるようになる。貴族に新たに与えられた自由と自尊心は、明らかに貴族の文学的、芸術的関心を高めたのである[De Madariaga 1981:89]。

『祖国史』2007年第4号に掲載されたマラシーノヴァの最新論文「ロシア貴族の解放——ピョー

トル三世の解放令とエカテリーナ二世の身分令——」[Марасинова 2007]も、この教育文化上の意義を評価している。まずマラシーノヴァは、貴族解放令は皇帝が貴族に対して政治的に単純に譲歩し、勤務義務から解放したのではなく、むしろ皇帝や国家への奉仕という特権を強化したものであると理解する。そして、この特権は貴族身分にそなわる権威の根拠となったが、貴族の皇帝に対する従属は決定的になったと判断する。貴族解放令以降、貴族の間では、国家勤務が自発的に就くべき最優先の責務であるという認識が次第に形成されていく。この責務の認識が、拷問や体罰の免除、教育や洗練された生活様式の普及とともに、貴族とくにその上層に指導者的態度をとらせた。貴族解放令は貴族の私的領域を拡大し、政権が予期しなかった「私人」という、ロシア文学史上の「余計者」の形象を生み出した。「私人」の存在、そしてその関心は国家の利害と対立した。この「私人」の中からインテリゲンツィアの第一世代が出現していくのである [Марасинова 2007:31]。

このようにラエフを出発点として、デ・マダリアーガやマラシーノヴァは、解放令によって皇帝や国家が貴族に対して統治への新たな参加形態を提供した側面を重視する。そのうえで、解放令が貴族の勤務観を転換させ、貴族が私人として文化を担う出発点になったと主張する。総じて、これらの主張は支持されるものではある。ただし、実態を確認するというけっして容易ではない問題が残されているように思われる。解放令が個人レベルでどのように認識され、いかにして私的な文化活動へと結びついたのか、地道に検証する作業が必要であろう。

(2) 家族と教育

つづいて、貴族の家族や教育にかかわる研究の動向を検討してみたい。ここでも、ラエフの作業が出発点となる。ラエフは『ロシア・インテリゲンツィアの起源』において「家庭と学校」と題した章を立て、貴族の成長と教育プロセスを紹介し、学校教育の状況を概説している。これによると、貴族とくに地方地主貴族の子どもは、父親が国家勤務により不在であるため、その直接的な監督を受けずに成長した。貴族の女性は教育を受けておらず、なかには識字力がない者さえおり、母親の役割は子どもを感情的な側面から養育することに限定された。しかも、子どもの養育に直接携わったのは乳母や女中、傳育係 дядька など、貴族が所有する農奴だったから、親子の感情的な結びつきは弱かった。子どもは読み書き、計算、カテキズムなどを家庭で学んだのち、引き続き外国人や神学校生徒のもとで家庭教育を受けるか、寄宿学校や陸軍士官学校などへ入学した。教育は国家勤務に就き昇進するため、また首都の上流社会で生活するために必須とみなされていた。貴族上層の間では都市の寄宿学校がおもな就学先だった。家族から引き離された子どもたちは学校生活の中で個人的な関心を芽生えさせ、友人関係を育んだ。しかし、彼らが経験したよりどころがないという感覚は生涯残った。

18世紀ロシアの教育を主導したのは国家だった。国家は貴族のために多くの教育機関を設立したが、初期においてその全てが国家勤務上の要件に完全に支配されていた。18世紀をつうじ

て、私立学校は数校存在しただけで規模も小さく、首都に集中していたため、教育において果たした役割は小さかった。18世紀末、正式に資格として認められた家庭教師はとくに教育の初期段階において多くの任務を担ったが、その教育内容は基礎にとどまった。これら「私教育」の分野に対しても国家の統制が加えられた。教育は国家勤務と不可分のものとみなされた。国家勤務のために教育が不可欠であるという考え方は、女子教育にも影響を及ぼした。女子教育は、将来の国家勤務者の妻や母親を育成する機能をもった。18世紀末、ヨーロッパをモデルに新しい人間の創造をめざして、生徒を外界、とくに「洗練されていない」家庭環境から隔離することを特色とする寄宿学校が設立された。このような学校の形態はその教育内容が外国文学、世界史、古典、ヨーロッパの哲学や法律などほとんど外国のものだったことも加わって、生徒にロシア社会からの強い疎外感を抱かせた[Raeff 1966:122-141]。このようにラエフは、家族内の感情関係や子どもの心理にも目を配りながら、子どもの教育プロセスをやはりその後の国家勤務と結びつけて論じている。

その後の研究は、家族史、女性史研究の枠内で性別比較や女子教育、家族生活へシフトしていった印象がある。貴族家族史研究の先駆者として知られるトヴロフは、18世紀末から19世紀中葉までの貴族家族、とくにその母子関係について検討している。それによると、母子関係は性別と権威、ヒエラルキーにもとづいて構築された。ごく幼少の時期(7歳ごろまで)を除き、息子に対する母親の役割は小さかった。息子の教育やしつけを行ない、将来の進路を決定し、模範の役割を担ったのは男性だった。性別役割がもたらした別離の感覚は、息子に対する母親の無批判的な態度や甘やかしとなって表れた。他方、母と娘は互いに強い一体感を持っていた。息子とは異なり、母親は娘の教育において大きな役割を果たした。将来の結婚とその後の家庭生活に備えた、知識や才芸の習得を目的とする娘の教育に母親は大きな責任と決定権を持っていた。母親と娘が愛情を深め、信頼関係を結ぶこともあれば、権威主義的な母親に対して娘が反感を覚えることもあった[Tovrov1976:15-43]。

ラエフやトヴロフによって断片的に描かれた家族内の感情関係も、たとえばプシュカリョーヴァにより、母子関係の変容プロセスが明らかになりつつある。プシュカリョーヴァによれば、母性に高い価値を置く民族的伝統を基層としながら、1770年代のヨーロッパ文学や啓蒙思想が子どもと母親の関係に影響を与え、母乳での育児が道徳的であると考えられるようになった。子どもの養育において母親の存在が最も大きく、乳母や祖母も一定の役割を果たしていた。

貴族女性の間では家庭教育が最も一般的で、その他、スモーリヌイ女学院をはじめとする官立教育機関、外国人が経営する私立寄宿学校があった。18世紀初頭、ヨーロッパ的教育を受けた貴族女性はごくわずかであったが、19世紀初頭には、読み書きのできない女性は風刺の対象にさえなった。農村で教育を受けながら成長した女性は、母性やそれと結びつくあらゆるものが私生活全体を満たしていたのに対して、都市で教育を受けた女性は、流行や社交生活に大き

な関心を寄せ、古いしきたりを軽蔑し、母性に欠ける傾向があった[Пушкарева 1997:191-220]。このようにプシュカリョーヴァは、1770年代を境とする近代家族的な母子関係への移行を主張している。ここでその要因とされているのはおもにヨーロッパの思想や文学の影響である。では、それらを含め、女性が受けた家庭教育などの教育成果は家族生活にどのように波及していったのだろうか。トヴロフが論じた母親が主導する娘の教育について、その理念やあり方、そしてそれらの変容プロセスを引き続き検討する余地があると思われる。

こうした家庭教育や私立学校教育など「私教育」をテーマとする本格的作業が近年、相次いで出されている。ロシアの地方都市ベンザを拠点に研究活動を行なっているセルゲーヴァは、2000年に『ロシアの私教育——18世紀第四四半期～19世紀前半——』を発表した。本書は、「私教育」領域における教育政策の特徴や「私教育」の発展プロセスについて論じたものである。セルゲーヴァによれば、私教育は教育史のさまざまな時代に、教育思想家や政治家の関心の対象となった。そして、さまざまな立場から、いささか公正さを欠いた分析や調査が行われてきた。しかし、「私教育」は各社会層・民族への多様な形態の教育を求める社会の要求に応じて広範に普及し、教育の発展に大きく貢献した[Сергеева 2000:16,120]。セルゲーヴァは行政文書や法令集などを史料の軸として「私教育」政策および「私教育」の展開プロセスを考察し、これに回想録史料を補完的に利用することで、多面的な「私教育」像の再構成に成功している。ただし、分析の中心が、史料状況の比較的恵まれた19世紀以降の私立学校に置かれる一方で、家庭教育については、同時代の教育思想家の言説を分析するにとどまっている。「私教育」教師資格制度の制定プロセスや家庭教育実態の検証が引き続き重要な課題となるだろう。

ソロジャンキナによる最新の文化史研究は、「異文化交流」の視点から貴族の教育文化にアプローチしたものである。とくに、ソロジャンキナが目しているのは、外国人女性教師 гувернантка の家庭教育活動である(注5)。ヨーロッパ文化圏の代表者として、外国人女性教師はヨーロッパの風俗や慣習を伝達する役割を果たした。外国人女性教師の教育は外国語、テーブルマナーや接客、社交的な会話術などの礼儀作法、絵画、音楽だけにとどまらなかった。外国人女性教師は子どもの日常の規律や食生活、健康を監督し、休日の余暇を企画した。また、子どもが読書する際、書物の選択において影響力を持ち、子どもの読書傾向を決定づけた。子どもが散歩や劇場、ホームパーティなどに外出するときには、外国人女性教師がかならず同行した。外国人女性教師から教育を受けることで、子どもは当時の貴族社会が求めていたフランス語の会話能力と社交儀礼を習得した。一方で、フランス語教育が優先された結果、母国語であるロシア語の読み書きが満足にできない子どももいた。正教徒の子どもの教育において、外国人女性教師がカトリックやプロテスタントの祈禱書を教材にするという、正教会の聖職者が看過できない状況も生じた。外国人女性教師の教育活動は、子どもにロシア人ではなくヨーロッパ人としてのアイデンティティを形成させた。あるいは子どもの中でロシア文化とヨーロ

パ文化がさまざまなレベルで融合する事態をもたらした。それが、教養を備えてはいるが、祖国でも外国でも異邦人とみなされ疎外されるような、ロシア貴族独特の世界観や行動様式を形成させたのである〔Солодянкина 2007:213-332,380〕。このようにソロジャンキナは、外国人女性教師が子どもの教育や生活を監督し、その細部まで指導することで、ロシア貴族の人格形成において多大な影響を与えていたと主張する。

最後に、アメリカのエンゲルが、これまでの女性史研究を総括した概説書をまとめている。以下、関連部分を要約しておきたい。ピョートル一世は男性と同様、女性に対しても国家への貢献を求めた。ピョートルは、国家勤務者の妻あるいは未来の国家勤務者の母となることが女性にとって最も重要な務めであると定義した。エカテリーナ二世はこのピョートル一世の貴族女性観を継承し、女子教育の普及に強力なリーダーシップを発揮した。エカテリーナ二世治世の1760年代以降、貴族の女子教育が広まった。教育を受けた女性は読書を介して文学の影響を受けた。その結果、女性は家庭内における夫と妻、親と子どもの平等な関係や、私生活や家庭生活の重要性を認識するようになった。

18世紀をつうじて、ロシア貴族女性の財産権は強化された。女性は領主の妻として、また独立した土地所有者として所領経営に大きな責任を負った。その都合上、女性が地方や中央の政府と接触し、法的手続きに訴える場面もあった。育児よりも所領経営の重責が優先され、新しい母親像の普及にもかかわらず、多くの貴族女性は育児に専念せず、子どもを乳母や家庭教師に委ねた。女性の主要な活動領域は依然として家庭にとどまっていた。ただエンゲルは、「私的領域としてしばしば理解されている家庭の事柄は、とくにロシアでは私的領域に属していなかった」ことに注意を促している〔Engel 2004:37〕。ロシア人の惜しみないホスピタリティを背景に、貴族の家族は親戚や隣人、孤児、医者、家庭教師、使用人を含む大家族を構成していた。その意味からすれば、家庭は貴族女性にとって十分に広い世界だったのである〔Engel 2004:5-47〕。このように、エンゲルはピョートル一世による西欧化政策、エカテリーナ二世期における女子教育や読書の普及と対応させながら、国家の女性観や女性の家族観、女性の活動領域とその役割を概観している。総じてそこでは、教育と新しい家族観の普及、私的領域にとどまらない女性の活動とそこでの女性の役割が高く評価され、強調されているように思われる。

(3) ヨーロッパ旅行

ラエフは上述の家族と教育にかんする議論の中で、外国旅行を貴族教育の頂点と位置づけている。ヨーロッパ修学旅行は、ピョートル一世が航海術やそれに類する技術を習得させるために、貴族の若者をヴェネチアやイギリス、オランダへ派遣したことを起源とする。その後、外国旅行の目的は技術の習得から、伝統的な人文科学の学業へと変わっていった。多くの場合、貴族の若者は国家によって外国へ送られ、帰国後は、国家勤務の責任ある地位に就くことが期待された。滞在中の教育内容は大部分が国家の必要にもとづき決定された。さらに18世紀末に

は、イギリス貴族のグランド・ツアーに相当するものが一部の貴族で流行した。彼らはヨーロッパの大学で聴講し、上流社交界で知識人や名士と交流し、貴族にふさわしい教養を習得した。彼らもやはり国家や社会に貢献したいという強い意志をもって帰国した。

しかし、貴族はヨーロッパ的教育を受けて帰国したのち、獲得した知識を活用できない現実と直面した。さらに彼らは、ロシア社会の現状や専制政治に失望し、疎外感や反感を抱いた。貴族は国家や社会において独立した人間として敬意が払われることを求めた。とはいえ同時に、貴族は自身の存在意義が国家勤務にあることも十分理解していたので、現実と理想の板ばさみにあった。貴族と国家の間に埋めがたい溝をつくったこうした体験は、貴族の国家勤務観を変容させた。以後、貴族は獲得した知識や経験を国家のためではなく、民衆のために活用することを目指すようになった。このような18世紀ロシア貴族の経験が、インテリゲンツィア第一世代に行動指針を与えたのである[Raeff 1966:143-147]。このラエフの整理は、ロシア貴族による旅行の目的、内容、学業上および人格形成上の成果、帰国後の旅行者に見られた感情的変化や彼らがとった行動など、多くの問題を提起している。

1990年代以降本格化した旅行研究は、従来からあったロシア人の異文化体験や文化交流にかんする研究、文学研究をふまえながら、これらの諸点について議論を深めている。ベレロヴィチは往復書簡や当局への報告書、旅行談、回想録、自伝、パスポート申請書類統計をもとに、18世紀におけるロシア貴族のフランス旅行について考察している。それによれば、青年旅行者の多くが、外交関連の職が好まれていた貴族上層に属していた。旅行は国家勤務とかかわる任務から切り離され、教育計画の中に組み込まれ、広い意味での余暇文化の特徴を帯びていた。旅行者たちは、ルイ十四世時代の歴史にまでさかのぼってフランスを注視していた。ベレロヴィチは、旅行にかんする情報を得ていた文学的なモデルや旅行案内、文明の模範を見出すべく、彼らの関心対象にも言及している[Berelowitch 1993]。このように、ベレロヴィチによれば、「先進地域」フランスから国益にかかわる成果を得ようとした貴族旅行は、より私的なものへと変化しつつあった。

近年のロシアでは、教育を目的とした貴族の外国滞在経験にかんする研究成果が相次いでまとめられている。『啓蒙時代のロシア人旅行者』の著者、ペテルブルグ大学教授コズロフは、ロシア人のヨーロッパ旅行を2つのグループ、すなわち国家のイニシアチヴで行われた旅行——学術探検、ロシア人将校によるヨーロッパ諸国の軍隊での実地訓練、奨学金制度(による派遣)、外交・諜報活動——と個人旅行——修学旅行(グランド・ツアー)——に大別して詳細に検討している。その際、旅行記は「ロシア人の心理を理解し、その内面世界を探り、18世紀に広範囲に行われた旅行とロシアにおける開かれた社会 открытое общество の形成との相互関係を考察することを可能にする」史料として高く評価されている[Козлов 2003:7]。以下、とくに教育とかかわる奨学金制度と修学旅行を中心に、本書の内容を紹介してみたい。

外国、主としてドイツの大学を留学先とする奨学金制度の試みは、ペテルブルグに設立された科学アカデミーが、1736年、アカデミー附属大学の卒業生に対して奨学金を給与したことから始まった。この制度は、語学準備教育が不十分であったこと、奨学金の送金が不定期でかつ遅配が目立ったことなど、問題点もあった。しかしながら、留学生はそれらの困難を克服し、もっぱら学問上の目的、すなわち学位取得をめざした。彼らの中には、留学先の大学教授から能力を認められて学位を取得し、帰国後は科学アカデミー助手に採用され、ついにはアカデミー正会員になった者もいた。彼らは獲得した能力を活用し、外国語文献の翻訳でもロシア社会に貢献した。科学アカデミーに倣い、モスクワ大学や貴族を対象とした特権的教育機関である陸軍幼年学校も、優秀な成績を修めた卒業生に奨学金を与え、外国に送り出した。なお、陸軍幼年学校の卒業生は、長期にわたる旅行に立出するにあたって奨学金の前払いを請願し、奨学金の給与に報いるべく尊き祖国にあらゆる利益をもたらすための努力を惜しまず、献身することを誓った[Козлов 2003:124]。この一連の儀礼は、当時の留学があくまでも国益をもたらすための奉仕の一形態であったことを象徴している。

上述の貴族解放令が貴族に対して国家勤務以外の道を開き、つづいて1785年に貴族への恵与状が移動の制限を撤廃した結果、学業を目的とするヨーロッパの大学への留学がより一般的となった。シェレメーチェフ、ガガーリン、ストローガノフ、アブラクシン、ルミャンツェフ、クラークン、ヴォロンツォフら貴族上層の中には、国の奨学金を当てにせず、独自の教育計画にもとづき修学旅行を行う者もいた。彼らは滞在先で学業と余暇を両立し、高価な美術品や書物を購入した[Козлов 2003:125]。

啓蒙君主時代における留学や旅行は、教育の重要な部分をなしていた。18世紀ロシアの教養人は知性の勝利を信じていた。祖国への奉仕を自身の責務とみなすとともに、ヨーロッパ啓蒙主義の長所を認識していた。それゆえ、ヨーロッパの大学で新たな知識を獲得し、学問を修め、世界観を拡大するという希望は、自然なものとしてみなされるようになった[Козлов 2003:137]。とりわけエカテリーナ時代にヨーロッパ旅行が普及した背景には、貴族が移動の自由を獲得したことや、ヨーロッパのひとびとの生活に関心を抱くようになったことがあった。文学史においても、旅行記や日記といったジャンルが、現実の世界の実情を伝えるものとして最盛期を迎えることになった[Козлов 2003:175]。以上、コズロフの研究は、ロシアの学術機関が派遣元となる留学制度が18世紀前半に開始され、それが18世紀後半、留学の拡大や修学旅行の広まりへと展開していくプロセスを明らかにしている。コズロフは、留学や旅行の背景に法的規定のみならず、祖国への奉仕という責務、ヨーロッパの知や思想に対するロシア教養人の共感があったことを重視している。

アンドレーエフの最新研究は、ロシアにおける大学教育システムの成立過程において外国留学が果たした役割を明らかにする試みである。アンドレーエフは、ロシア人学生の成績簿や学

業報告書、回想録、書簡にもとづき、ドイツの大学における学業の性格がどう変容したかを考察している。18世紀中葉、教養ある貴族の間で大学教育の価値が理解されるようになった。貴族は啓蒙思想を基準に大学を選び、ライデン、ストラスブール、ゲッチンゲン、ライプツィヒの諸大学へ留学した。ロシア人留学生はエカテリーナ二世時代に最大となり、その出身は貴族エリートから非貴族身分まで多様化した。留学のおもな担い手は国家であったが、エカテリーナ二世治世の半ば以降は、有力者が留学生を派遣するようになった。たとえば、在ウィーン公使ゴリーツィン公爵は留学のための最初の奨学金制度を設立した。留学先では、啓蒙思想の影響下、百科全書的知識の獲得がめざされた。しかし、フランス革命が勃発すると、反動化した国家は留学を禁止した。アレクサンドル一世治下、教育改革によって大学教育システムが構築されると、貴族のヨーロッパ修学旅行はもはや過去のものとなる。それでも、ドイツ留学は祖国の大学に、進歩的な研究方法や新しい学問知識を備えた教授をもたらすことになった[Андреев 2005]。このように、アンドレーエフによれば、教養ある貴族の出現や国家、のちには有力貴族による制度拡充がドイツ留学の枠組みを形成した。この留学に、ロシアにおける高等教育の起源を見ろという構想は、おそらくソ連邦崩壊後の露独の接近を背景とするものであり、興味深い。しかしながら、コズロフやアンドレーエフの研究はどちらかといえば留学などの制度的側面に関心を置く一方で、ラエフが問題にした、旅行者の意識的变化についてはあまり注意を払っていない。コズロフらが利用した豊富な史料を、別の視点から検討する作業が引き続き期待されるだろう。

なお、アメリカの研究者ディキンソンの最新研究では伝統的な文学サイドからのアプローチが採用され、文学ジャンルとしての旅行記の変遷が考察されている。とくに、旅行記の記述様式や語彙、内容を手がかりに、書き手の目的意識や審美眼などを読み取ろうとする点に新味がある[Dickinson 2006]。ディキンソンの研究は旅行研究に限らず、文学研究との接合が教育文化史の新たな展開において将来、有望であることを示している。

おわりに

ロシア貴族史研究は、冷戦時代に欧米を中心に蓄積された成果の上に立って、1990年代以降、ロシアおよび外国の研究者が参加した研究へと展開を見せている。その方法は従来の政治史、国制史から、学際的研究や文化研究へと多様化している。この傾向は教育文化史についてもあてはまる。第二節で取りあげたように、近年の研究は教育文化と政治、家族、女性、文化交流などとの関連性を問い、今後も方法は多様化する傾向にあると考えられるからである。

本稿では、教育文化にかかわる3つのテーマを選択し、その研究動向を検討してきた。貴族文化史全体について論じるには材料不足の感が否めない。とはいえ、考察をつうじて、長期にわたるエカテリーナ二世の時代、とくに1770、80年代に文化史上の画期が存在することが確認

できたと思われる。というのは、この時代につきのような変化が起きたからである。第一に、貴族解放令が貴族の国家勤務観を変容させ、貴族が文化など新たな活動を行なう可能性を拡げた。第二に、家族と教育の領域では、女子教育が普及するにつれて、親子関係を重視する新しい家族観が定着していった。そして最後に、国家による派遣として開始されたヨーロッパ旅行は、旅行者の増加および旅行の目的や内容の「私的」なものへの変容を経験した。

本稿で取り上げた先行研究からは、以上のような変化にともない、国家勤務にもとづいた思考、行動、生活様式を持つ従来の貴族の中から、国家勤務をそれらの様式を中心に置きつつも、国家勤務から一定の距離を持つとうとした、あるいは持たざるを得なかった新しい世代の貴族が形成されていったことが読みとれる。一方では、国家は貴族に対して、国家勤務ではなく、地方や社会の指導者として活動し、貢献することを期待した。他方で、強い使命感を帯びてヨーロッパで学んだ貴族たちは、帰国後、ロシア社会の現状や専制政治に失望した。彼らは獲得した知識や経験を生かす場を見いだせず、あるいはそれを国家のために捧げることに違和感を抱いた。家庭を中心的な活動領域とした貴族女性の間でも、新しいタイプの女性が誕生した。従来の女性は育児や子どもの教育にたずさわる機会が乏しく、子どもとの感情的な結びつきが弱かった。国家勤務者の母や妻を育成する目的で教育が普及すると、新しい家族観を持つ女性が現れはじめた。

周知のように、1770年代以降、貴族出身者を中心に、社会の啓蒙を意図した出版活動や文学活動が本格化する。また、18世紀末～19世紀初頭には、ヨーロッパ文学の翻訳やサロンで活躍する女性が登場する。そのようなロシア貴族の社会・文化活動は、本稿でみたような、国家勤務によって大きく規定されていた貴族の思考、行動、生活様式の変化と密接な関係にあったのである。引き続き、本稿で論じたテーマを深化させ、貴族の国家観や君主観の変化など、関連すると考えられる問題へと考察を拡げることによって、貴族教育文化史の視点から、この18世紀後半における文化史上の転換とその要因を検証していく必要があるだろう。

注

- (1) ピョートル一世時代以前、ドヴォリャンストヴォ дворянствоは軍役を中心とした勤務義務を負い、その対価として報酬を得ていた。これに対し、ボヤールストヴォ боярствоは世襲地を所有していた。ボヤールストヴォはその自由意志にもとづき国家勤務に就き、能力によってではなく、家柄や先祖の功績に応じて要職に任ぜられた。ピョートル一世は貴族会議を廃止し、世襲地と封地を統一し、勤務条件を一様にした。その結果、ドヴォリャンストヴォがボヤールストヴォを吸収することで、一つの身分が形成された。従来、日本のロシア史学ではボヤールストヴォを「貴族」、ドヴォリャンストヴォを「士族」と訳し分けてきた。本稿ではヨーロッパ貴族との比較を念頭に置くため、ドヴォリャンストヴォに対し「貴族」という用語を使用する。
- (2) 訳出にあたりロートマン[1997:17-18]を参考にした。なお、サルトゥイチャーハとは19世

紀の高圧的で残忍な女地主のひとり、農奴制の悪しきシンボルとされた [ロートマン 1997:17]。

- (3) ロシア貴族は多様な出身や教育体験、異なる利害を持つ者から構成されていた。ピョートル一世は1722年、「官等表」を制定し、国家勤務者が門地ではなく年功と功勞にもとづいて出世・昇進するシステムを構築した。これにより、非貴族身分出身者でも官僚として一定の官位に達した者には自動的に(一代・世襲)貴族身分が与えられた。しかしながら、彼らは領地を持たず、もっぱら勤務によって生計を立てていた点で、世襲貴族を中心とする貴族エリートとは異質だった。
- (4) トロイツキーの研究を参照したものとして鳥山[1979:61-112]がある。
- (5) ソロジャンキナはヨーロッパ出身者を念頭に外国人教師を論じている。その際、この外国人教師による教育活動とヨーロッパ系のロシア帝国臣民によるそれとを厳密に区別していない。その根拠を、ソロジャンキナはつぎのように説明している。「法律上は、ロシア出身で国家勤務に就く外国人[ヨーロッパ系のロシア帝国臣民]は生粋のロシア人と同等の地位にある。しかし、世論は法規範に従わず、ロシア帝国臣民か否かにかかわらず、ヨーロッパ系のひとつとをすべて外国人とみなした。したがって、本書では当時、広く受け入れられていた見解にもとづき、フランス人、ドイツ人、イギリス人、イタリア人などヨーロッパ系の女性教師を外国人女性教師と呼ぶ。ポーランド人女性も、ポーランド王国の領外で職に就いた場合、外国人とみなされた。これは、リヴォニア、クールラント、エストニア出身のドイツ人女性についても当てはまる。ロシアで生まれた外国人の子どもも同様に外国人とみなされた」 [Солодянкина 2007:15]。

参考文献

Андреев А. Ю. 2005

Русские студенты в немецких университетах XVIII- первой половины XIX века. М. Иванова Л. В. (Отв. Ред.) 2001

Дворянская и купеческая сельская усадьба в России XVI-XX вв.: исторические очерки. М.

Козлов С. А. 2003

Русский путешественник эпохи Просвещения. СПб.

Козлов С. А. 2006

Русская провинция Павла Болотова: "Настольный календарь 1787 года". СПб.

Лотман Ю. М. 1994

Беседы о русской культуре. Быт и традиции русского дворянства (XVIII- начало XIX века). СПб. なお、ユーリー・ミハイロヴィチ・ロートマン著／桑野隆、望月哲男、渡辺雅司訳『ロシア貴族』、筑摩書房、1997年は本書の邦訳である。

Марасинова Е. Н. 1999

Психология элиты российского дворянства последней трети XVIII века. М.

Марасинова Е. Н. 2007

Вольность российского дворянства (Манифест Петра III и сословное законодательство Екатерины II) // Отечественная история No.4.

Пушкарева Н. Л. 1997

Частная жизнь русской женщины: невеста, жена, любовница (X- начало XIX в.) М.

Романович-Славатинский А. В. 1870

Дворянство в России. От начала XVIII века до отмены крепостного права. СПб.

Сергеева С. В. 2000

Частное образование в России (последняя четверть XVIII- первая половина XIX вв.). Пенза.

Солодянкина О. Ю. 2007

Иностранские гувернантки в России (вторая половина XVIII- первая половина XIX веков). М.

Тартаковский А. Г. 1991

Русская мемуаристика XVIII- первой половины XIX в.: от рукописи к книге. М.

Троицкий С. М. 1974

Русский абсолютизм и дворянство в XVIII в.: формирование бюрократии. М.

Фаизова И. В. 1999

"Манифест о вольности" и служба дворянства в XVIII столетии. М.

Шмидт С. О. 2002

Общественное самосознание российского благородного сословия, XVII- первая треть XIX века. М.

Burbank, Jane and Ransel, David L. (eds.) 1998

Imperial Russia: New Histories for the Empire, Indiana University Press.

Cahiers 1993

Cahiers du monde russe et soviétique, 34/1-2.

De Madariaga, Isabel 1981

Russia in the Age of Catherine the Great, London.

Dewald, Jonathan 1996

The European Nobility, 1400-1800, Cambridge University Press.

Dickinson, Sara 2006

Breaking Ground: Travel and National Culture in Russia from Peter I to the Era of Pushkin, Amsterdam and New York.

Dukes, Paul 1967

Catherine the Great and the Russian Nobility, Cambridge University Press.

Engel, Barbara Alpern 2004

Women in Russia, 1700-2000. Cambridge University Press.

Jones, Robert E. 1973

The Emancipation of the Russian Nobility, 1762-1785, Princeton University Press.

Le Donne, John P. 1987

"Ruling Families in the Russian Political Order. I. The Petrine Leadership, 1689-1725, Genealogical Tables; II. The Ruling Families, 1725-1825," *Cahiers du monde russe et soviétique*, 28/3-4.

Le Donne, John P. 1991

Absolutism and Ruling Class: The Formation of the Russian Political Order, 1700-1825, Oxford University Press.

Lieven, Dominic 1992

- The Aristocracy in Europe, 1815-1914*, Macmillan.
- Lieven, Dominic 2006
“The Elites” in Dominic Lieven(ed.), *Imperial Russia, 1689-1917*(The Cambridge History of Russia), Cambridge University Press, 2006.
- Meehan-Waters, Brenda 1979
“Elite Politics and Autocratic Power,” in A. G. Cross(ed.), *Great Britain and Russia in the Eighteenth Century: Contacts and Comparisons*, Newtonville.
- Meehan-Wares, Brenda 1982
Autocracy & Aristocracy: The Russian Service Elites of 1730, Rutgers University press.
- Raeff, Marc 1966
Origins of the Russian Intelligentsia: The Eighteenth-Century Nobility, New York and London.
- Roosevelt, Priscilla 1995
Life on the Russian Country Estate: A Social and Cultural History, Yale University Press.
- Scott, H. M. (ed.) 1995a
Western Europe (The European Nobilities in the Seventeenth and Eighteenth Centuries, Vol.1), London and New York.
- Scott, H. M. (ed.) 1995b
Northern, Central and Eastern Europe (The European Nobilities in the Seventeenth and Eighteenth Centuries, Vol.2), London and New York.
- Stites, Richard 1978
The Women's Liberation Movement in Russia: Feminism, Nihilism, and Bolshevism, 1860-1930, Princeton University Press.
- Tovrov, Jessica 1978
“Mother-Child Relationships among the Russian Nobility”, in David L. Ransel (ed.), *The Family in Imperial Russia: New Lines of Historical Research*, University of Illinois Press.
- 小野寺歌子 2000
「ロシア貴族の家庭教育——18世紀後半における外国人家庭教師を中心に——」『ロシア語ロシア文学研究』、日本ロシア文学会、第32号、札幌、115-127頁。
- 小野寺歌子 2006
「18世紀後半におけるロシア貴族のヨーロッパ修学旅行——国家勤務者・愛国者養成のためのヨーロッパ体験とその成果——」『ロシア語ロシア文学研究』、日本ロシア文学会、第38号、札幌、79-87頁。
- ユーリー・ミハイロヴィチ・ロートマン 1997
桑野隆・望月哲男・渡辺雅司訳『ロシア貴族』、筑摩書房。
- 土肥恒之 2000
『岐路に立つ歴史家たち——20世紀ロシアの歴史学とその周辺——』、山川出版社、東京。
- 鳥山成人 1979
「十八世紀ロシアの貴族と官僚」吉岡昭彦・成瀬治編『近代国家形成の諸問題』、木鐸社。
- 橋本伸也 2001
「19世紀ロシアのエリートの学校——身分制原理から専門職者養成へ——」橋本伸也ほか著『近代ヨーロッパの探究4 エリート教育』、ミネルヴァ書房、京都。